東北地域における教育旅行等の現状報告と今後に向けて

平成２３年4月２１日
小椋　唯一氏（福島県猪苗代町）

現在の東北地方は大変なことになっております。先週、東北の情報の中心地である仙台に行って各地の情報を仕入れてきました。長文になりますが、ご報告いたします。

仙台市の榴ヶ岡公園の桜は華やかに咲いていましたが、東北農政局、東北運輸局、東北観光推進機構、帰りに福島県観光物産交流協会を訪ねて聞いてきた話は、どこでもしんしんと身体が冷えるような寒い話ばかりでした。

結論から先に申し上げますと、お目にかかった皆さまは余震、放射能問題に終息の兆しがない現在、何をどう打ちだしても逆宣伝になる可能性の方が高いため、区切りが付いた時点で攻勢に反転するための“準備期間”というとらえ方をしていました。

実は震災の被害は太平洋側だけであり、原発事故は福島県の一部なのですが、その影響は東北全体に及び、被害の無かった山形県や秋田県の観光にも多大なキャンセルをもたらしています。いわゆる“旅行マインド”が冷え込んでいるため、東北以外の箱根や京都すら観光客が動いていないそうです。

特に教育旅行では、首都圏からの学校も３学期は持ちこたえたのですが、新学期に入って取り消しが相次ぎ、ほとんど全滅状態です。東京都内のいくつかの教育委員会が「東北には行かないように」という通達を出しました。

また、北海道から多かった北東北の修学旅行コースは、北海道庁が「道内で実施せよ」という方針を打ち出したことで、全滅状態だということですから、東京都だけではなく、“安全宣言”が出なければどこも状況は同じようです。

新幹線が仙台以北の開通が余震のため５月にずれこみ、東北地方への入口である福島県で放射能問題があるため、そこを通過すらしたくないという学校もあって、各学校への聞き取り調査の結果はとても「東北を励ましそう」「支援しよう」という印象ではなかったようです。

そうなると、今後は東北地方以外から来る観光客や教育旅行は、この際あまり期待できないため、東北の地理感があり、現実をよく理解している東北地方域内で往来を活発にするしか、今のところ手がないと言うことになります。

笑い話ですが、これまで県外客に圧倒されて見られなかった福島市の花見山公園や、三春町の滝桜はやっと福島県民が落ち着いて花見を出来るようになるかも知れません。

そんなわけで、県も国も予算が動かせず、順調にいっても事業が出来るのは、６月以降になるようですが、それでも「東北の夏祭り」はどこも実施する方向で準備しているようです。驚いたのは相馬市の「野馬追い」で、２５０頭の馬がいたのですが、津波に流されなかった１００頭で実施するそうです。

これは神事ですから、場所もこれまでの所にこだわるそうです。原発の極く近いところなので、客は集まらなくても昔ながらの神事は継続するという意志を示しているところに、“ 東北人の根性 ” を感じました。

教育旅行については、そのようなわけで余震や放射能問題の目途がついてから、安全宣言を出し、それから動き始める予定です。つまり、２～３年の空白があっても「いいじゃないか」、もともと東北全体で見れば、首都圏からの修学旅行、教育旅行が圧倒的に多かったわけではありませんので、地に足を着いた活動をしようということです。

明るい展望はありませんが、それでも東北地方には人が住み、平常の生活を送っている方々の方が多いわけですから、“ この程度 ” のことで負けてはいられません。

これからも“ 東北は東北らしく ”行きたい、牛歩でもいいから一歩一歩着実に行きたい、すべてにリセットが掛かった現在、逆にこれをチャンスとして「東北ルネサンス」にしたいというのが、皆さんの総意であるようでした。

この先が読めないのがつらいところですが、この際これまでのしがらみや前例踏襲という路線から、リセットが掛かってしまったのですから、まったく“ 新しい発想 ” で地域の振興計画を考えたいと思います。

観光や交流、体験プログラムも教育旅行も地域が元気になるための「手段」のひとつとして考えれば、地域を元気にする方法は、まだまだあるはずですし、東北にはそのポテンシャルがあります。また地域の人だと気がつかないところにある気がします。

ぜひ、若い皆さんからのこれまで出来そうになかった、前例のない復興、振興プランがありましたらぜひご紹介ください。今回の災害を東北地方が再生するための発想の転換のチャンスに活かしたいと思います。

（筆者：観光庁「観光カリスマ」認定者、東北観光推進機構教育旅行アドバイザー）